

項目		評価の観点	小項目評価	評価		項目に関する分析・意見 など ○成果 ▲課題 (職員)	提言 ◇学校関係者 (地域等)	今後の改善に向けて
				自己 (職員)	学校 関係者			
確かな学力と個性を伸ばす教育の推進	主体的・対話的で深い学び	互いに認め合う支持的風土を育てる学級・学年集団づくりに努めた。	B	B	B	○ペア・グループでの話し合い活動が定着し、前向きに取り組む児童が増えた。 ○「めあて」「振り返り」を意識した授業づくりが広がった。 ○ICT活用により、意欲的に学ぶ姿が見られた。 ○書く活動を重視し、考えを言語化する力が伸びた。 ○担任交換授業や校内研究を通して授業改善の視点が共有されつつある。 ▲聞く姿勢・聴き合う風土にばらつきがある。 ▲学級全体での対話が深まらず、発言に消極的な児童が一定数いる。 ▲「めあて」が作業提示にとどまり、深い学びにつながらないケースがある。 ▲学習に困難を抱える児童への支援が不十分。 ▲教材研究の時間が確保できない。 ▲学力差が大きく、学習が苦手な児童へのアプローチが難しい。	○ICTを活用した学習が広がり、児童が意欲的に取り組む姿が見られる。今後は、めあて提示にとどまらず、学びの深まりにつながる活用をさらに工夫されたい。 ○発表時のタブレット操作など、聞く姿勢を整えるための学習規律を徹底されたい。 ○学習目標や評価指標を家庭にも分かりやすく共有してほしい。 ○めあて・振り返りを生かした授業づくりを継続し、質の向上を図ってほしい。 ○学習が苦手な児童への支援を今後も丁寧に続けてほしい。 ○担任の交換授業は、新しい刺激となる可能性があり、ぜひとも推進されるべき取り組みである。	○聴く必然性のある課題設定、対話が深まる授業構成の工夫。 ○「めあて」の質を高めるためのルーブリック化・共通理解の推進。 ○発言しやすい学習環境づくり（場の設定・小集団の工夫）。 ○ICTを活用した教材研究・授業改善の推進。 ○学習が苦手な児童への支援体制（個別・小集団、補充学習など）の整備。 ○教員間で「どこまでできたらよいか」の基準を共有する。
		協働する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善に努めた。	B					
		「めあて」「ふり返り」や学び合いを取り入れた授業づくり、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を育む授業計画など、主体的・対話的で深い学びを追求する授業研究や研修会に取り組んだ。	B					
	道徳教育の充実	生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的实践力を育てる活動を工夫した。	A	B	B	○道徳参観の実施により、保護者理解が進んだ。 ○学年を超えた交換授業が定着しつつある。 ○教材研究を進め、学年で教材を共有する動きがある。 ○「生きる教育」など、実生活と結びつけた指導が成果を上げている。 ○初任者研修などを通じて授業改善の視点が広がった。 ▲教材研究の時間不足。 ▲教員の道徳授業への意欲低下。 ▲資料の整理が不十分（古い教材が混在）。 ▲道徳的価値に気づけない児童への手立てが弱い。 ▲道徳コーナーが活用されていない。 ▲「評価のための授業」になってしまう懸念。	○道徳の評価が児童の多様な考えを否定することにならないよう、評価方法の工夫を望む。 ○全学年での道徳参観の実施により、保護者の理解が深まった点は評価できる。 ○ICTの利用で道徳の資料の整備や活用がされているため、さらに充実させてもらいたい。 ○校内でのあいさつが十分でない場面があるため、日常的なあいさつ習慣の定着を図ってほしい。 ○生命尊重の教育について、学校・家庭・地域が連携して取り組み、いじめの未然防止につなげてほしい。	○ICTを活用した教材共有（パワポ・場面絵など）の整備。 ○全校で重点価値を設定し、統一した道徳教育を展開する。 ○道徳コーナーの更新・周知。 ○教材研究の時間確保（学年・校内研での位置づけ強化）。 ○保護者への発信を強化し、家庭との連携を深める。
		道徳科の教材、評価に関する研究を行い、資料の整備・交流に努めた。	B					
		道徳科の時間を公開するなど、保護者や地域との連携も視野に入れて道徳教育に取り組んだ。	B					
	体力づくり	たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善に努めた。	B	B	B	○縄跳び大会、スーパートライ、大縄などの行事で体力向上が見られた。 ○体育の宿題やチャレンジランキングにより継続的な運動習慣が育っている。 ○体育の授業の流れを学年で統一し、分かりやすい授業づくりが進んだ。 ○運動に親しむ児童が増えた。 ▲体育の宿題が形骸化しつつある。 ▲運動が苦手な児童への支援が弱い。 ▲担任・学年による温度差が大きい。 ▲暑さ対策で体育ができない時期があり、年間計画に影響。 ▲体育の授業づくりの知識不足、安全面の不安。 ▲休み時間の外遊びが広がらない。	○体育の宿題が家庭環境によって実施しにくい場合があるため、取り組みやすい方法の工夫を望む。 ○運動が苦手な児童への支援をより丁寧に言い、無理なく体力づくりに参加できる環境づくりを進めてほしい。 ○体育の宿題は親子の関わりを生む一方で負担もあるため、目的や効果を明確にし、継続しやすい形を検討されたい。 ○暑さなどによる体力低下が懸念されるため、運動の楽しさを伝え、日常的に体を動かす習慣づくりを促進してほしい。	○体育の宿題を「主体的な課題」にするための仕組みづくり。 ○体育部と学年の連携強化、技能面の到達目標の共有。 ○体育館の環境改善（エアコン等）。 ○運動が苦手な児童への個別アプローチ。 ○外遊びの紹介や、児童が企画する体力づくり活動の導入。 ○体育授業の研修機会を増やす。
		「体育の宿題」、チャレンジランキングなど、運動に親しむ環境づくりや体力づくりを推進する運動実践に努めた。	B					
		体を動かす気持ちよさを体験させ、進んで体を動かそうとする意欲の育成に努めた。	B					
	指導改善（組織的・計画的）	指導体制・指導方法の工夫改善に努め、学力向上を目指した。	A	A	A	○校内研究・OJT・学力向上策が計画的に進んでいる。 ○研究授業や授業公開を通じて教員同士の学びが進んだ。 ○体育部会や委員会活動が学校を盛り上げている。 ○ICT活用により授業改善が進んでいる。 ○研究通信の発行など、情報共有の工夫が見られる。 ▲研究授業の参観が少なく、若手の学びの機会が不足。 ▲業務量の偏り、働き方改革の遅れ。 ▲教科部会や研修の機会が不足。 ▲データ共有（教材・授業資料）が不十分。 ▲体育部の負担が大きい。	○授業交換にはメリットがある一方で、児童が質問しづらい場面もあるため、情報共有やフォロー体制の充実を望む。 ○タブレット活用に伴う視力への影響を考慮し、使用時間や家庭での負担に配慮した運用を検討してほしい。 ○宿題やプリントの伝達に不明点が生じることがあるため、学級間での情報共有をより丁寧に進めてほしい。 ○学力向上策が計画的に進んでいる点は評価できる。特定の教員に負担が集中しないよう、組織的な支援体制の強化を期待する。 ○働き方改革を推進するためにも、教職員間の情報共有や業務分担の工夫を引き続き進めてほしい。	○授業公開を気軽に行える文化づくり。 ○若手が自由に授業参観できる時間の設定。 ○教材・授業データのデジタル共有（フォルダ整備）。 ○学年会の定例化と計画的な対話の確保。 ○業務の見える化と分担の適正化。 ○AI活用による業務効率化（文書作成・添削など）。 ○外部専門家との連携による指導改善。
		学校全体として指導力・教育力の向上を目指し、職員研修に努めた。	A					
		働き方改革や教育活動の質の改善に向け、計画的な準備・役割分担・ICT活用などの取組に努めた。	B					

育ちと学びを支える連携	家庭・地域との連携・協働	保護者との個別相談や必要に応じて関係機関との連携を図り、子育てに対する積極的な支援に努めた。	B	B	B	○tetoru・学級通信・週予定などを通じて、家庭への情報発信が充実した。 ○個別懇談や面談を通して、家庭の困り感に寄り添いながら連携できた。 ○PTA・保護者ボランティアの協力が広がり、授業支援（ミシン等）にも参加。 ○地域ボランティアの活動が始まり、学校と地域のつながりが強まった。 ○不登校児童への家庭連携が丁寧に行われ、登校改善につながった例が多い。 ○SC・SSW・専門機関との連携が進み、家庭支援の質が向上した。 ▲情報発信をしても受け取ってもらえない家庭が一定数ある。 ▲個別懇談の日程がタイトで、家庭の都合と合わないケースが多い。 ▲ホームページの閲覧数が少なく、情報発信の効果が薄い。 ▲地域の情報や人材が教員間で共有されていない。 ▲家庭訪問がなくなったことで、家庭状況の把握が難しくなっている。	○学校からの情報がtetoruを中心として適切に配信されていて、保護者や地域と情報共有が図られていることが、学校への信頼感や安心感につながっている。 ○tetoruは便利だが、紙での配布も併用し、誰もが情報を受け取りやすい体制を整えてほしい。 ○ホームページが見にくいとの声があるため、情報の探しやすさや表示方法の改善を望む。 ○OJT・ICTなど専門用語の使用について、保護者にも分かりやすい説明や表現を工夫してほしい。 ○tetoruが不通になることがあるため、重要情報が確実に届く仕組みづくりを進めてほしい。 ○時間割配信の有無がクラスで異なるため、情報発信の方法を統一し、家庭が確認しやすい環境を整えてほしい。 ○多様なツールを活用した情報発信を今後も充実させ、家庭・地域との連携をさらに深めてほしい。	○情報発信の方法を精選し、tetoru・紙媒体・HPの役割を整理する。 ○個別懇談の時期を見直し（1学期末・2学期制の検討）。 ○地域人材・地域資源の一覧化と、教員全体での共有。 ○PTA・地域ボランティアの活動を継続し、学年で活用しやすい仕組みづくり。 ○防犯・防災教育など、地域と協働できるテーマを積極的に位置づける。
		保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会の実施や地域人材の活用に努めた。	B					
		家庭・地域と連携しながら、防犯・防災教育の推進、感染症対策の推進を図るため、メール配信やホームページなどを活用して情報発信をし、安心・安全な学校づくりに努めた。	B					
	保幼小中の連携	保幼小中の連続性を意識し、子どもの校種間交流や教師の出前授業などの具体的な連携に努めた。	C	B	B	○保幼小連絡会・小中連絡会を通して、児童の実態を共有できた。 ○幼稚園・保育園への出前授業や参観により、入学前の情報が充実。 ○幼小交流（おもちゃ祭り・見学など）が児童の成長につながった。 ○中学校とは「くらしの約束」など、生徒指導面での連携が進んだ。 ○ケース会議で卒園園との情報共有ができ、支援の質が向上。 ○唐教研を通して、他校種の取り組みを知る機会があった。 ▲唐教研が形骸化し、実質的な学びにつながっていない。 ▲園の数が多く、すべてと丁寧に連携するのが難しい。 ▲一人園・他府県からの入学児童が増え、情報不足のまま入学するケースがある。 ▲担当以外の教員が園とのつながりを把握しにくい。 ▲校種間の授業公開が難しく、互いの教育観を共有しにくい。	○園や中学校との連携を継続し、地域全体で子どもの育ちを支える体制をさらに強めてほしい。 ○入学前から学校に親しめる機会（学校開放など）があると、児童や保護者の不安軽減につながるため、実施を検討されたい。 ○恵まれた立地を生かし、体験入学などの交流活動を充実させ、スムーズな接続を図ってほしい。	○園・中学校との連携内容を可視化し、教員全体で共有。 ○一人園・未参加園への情報収集を丁寧に行う体制づくり。 ○校種間交流を「行事」ではなく「学習」として組み込む。 ○唐教研の目的を再整理し、実のある研修に再構築。 ○保幼小中、特別支援学校で共通の生徒指導観・支援観を持つための協議の場を増やす。
		唐崎人権教育研究会（唐教研）など、保幼小・小中の校種の枠を超えた合同研修会を実施した。また、保幼小連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の授業公開に努めた。	B					
		保幼小連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めた。	A					
組織体制の充実	生徒指導体制の充実	日ごろから子どもとの関わりを意識的に高め、子どもが気軽に相談できる雰囲気づくりなど、諸課題の早期発見、日常的な予防指導に努めた。	B	A	B	○事案発生時にチームで対応し、早期解決につながった。 ○生徒指導・子ども支援コーディネーターの丁寧な支援が機能している。 ○情報共有がスムーズで、学校全体で子どもを見守る体制が整っている。 ○未然防止のための資料・指導内容が定期的に発信されている。 ○いじめ重大事態につながる事案も、組織対応で抑止できた。 ○メタモジ等を活用し、学年で生徒指導情報を共有できた ▲同じ児童の加害行為が繰り返されるケースがあり、抑止が難しい。 ▲事案が多く、人員が手薄になることがある。 ▲予防指導が担任任せになり、質にばらつきがある。 ▲事案対応が行き当たりばったりになることがある。 ▲「やり返し」事案が多く、指導の一貫性が必要。 ▲生徒指導と特別支援の連携が十分でないケースがある。	○生徒指導において、組織として対応・運営がなされているため、好ましく思う。 ○同様の事案が繰り返されることがあるため、事後指導だけでなく、背景要因への働きかけや未然防止の強化を望む。 ○カウンセリングの利用が予約制である点について、緊急時にすぐ相談できる体制の整備を検討してほしい。 ○不登校やトラブルの再発を減らすためにも、継続的な支援と早期対応をさらに充実させてほしい。	○事案のアセスメントを丁寧に引き、原因分析を共有する。 ○生徒指導と特別支援の連携を強化し、両面から支援する。 ○放課後に学年間で情報共有する時間を設定する。 ○予防指導を教育課程（総合・道徳）に位置づけて計画的に行う。 ○指導内容・回数を精選し、全学級で確実に実施できる仕組みをつくる。 ○担任が抱え込まない体制を維持しつつ、人員配置の工夫を検討する。
		問題行動や不登校などの課題に対して、学年・担当と共に組織的な指導・支援ができた。	A					
		あいさつ運動、子どもくらしのやくそく、いじめ対応など、家庭・地域・関係機関との連携による指導に努めた。	A					
	特別支援教育の充実	支援を要する児童の個別の指導計画を作成・活用し、支援に努めた。	A	B	B	○個別の指導計画の作成・検討が学年と特別支援部会で連携して進められた。 ○校内ケース会議や巡回相談を活用し、支援の質が向上。 ○支援級入級の判断を丁寧に行う体制が整ってきた。 ○学年で児童理解を深め、支援の方向性を共有できた。 ○情報共有により、学校全体で支援する姿勢が広がった。 ▲個別の指導計画の文言が不十分で、毎年修正が大変。 ▲手立ての検討が経験の浅い教員には難しく、前年度踏襲になりがち。 ▲特別支援部会に挙がっていない児童が多く、情報が偏る。 ▲記入量が多く、時間確保が難しい。 ▲学年での情報共有が十分でない場合がある。	○個別の指導計画の作成が、組織と連携して作成されていることは好ましく思う。 ○個別の指導計画の作成においては、AIの活用は補助的な範囲にとどめ、教師が児童を見て感じ取る情報を大切にしてほしい。 ○発達障害やグレーゾーンの児童が増えている現状を踏まえ、補助員の配置など人的支援の充実を検討してほしい。 ○個別の指導計画の作成負担が大きいため、学校全体で支援体制を整え、教員が無理なく取り組める環境づくりを進めてほしい。	○個別の指導計画に「入級に至る経過」を必ず記載する。 ○支援計画の手立てについてAI等を活用して効率化し、質を高める。 ○特別支援部会に児童を挙げる基準を明確化し、学年で共有。 ○情報共有の場と時間を確保し、校内で支援体制を整える。 ○記入負担を軽減するため、様式の見直しや記入時間の確保を検討する。
		組織的・計画的な特別支援教育の体制づくりに努めた。	B					
		巡回相談などを活用し、関係機関と連携した相談体制の充実に努めた。	B					

児童アンケート3456年集計

0% 20% 40% 60% 80% 100%



1、学校は、楽しい

2、授業はよくわかる

3、自分で考え、工夫しながら宿題などの家庭にとりくんでいる。

4、子どもがよくないことをしたら、先生は注意してくれる。

5、家や地域や学校で、自分から進んであいさつをしている。

6、一生懸命そうじに取り組んでいる。

7、授業中、先生や友達の話をしっかりとしている。

8、困ったことがあったとき、先生はいっしょに考えてくれる。

9、思いやりの心を持って行動している。

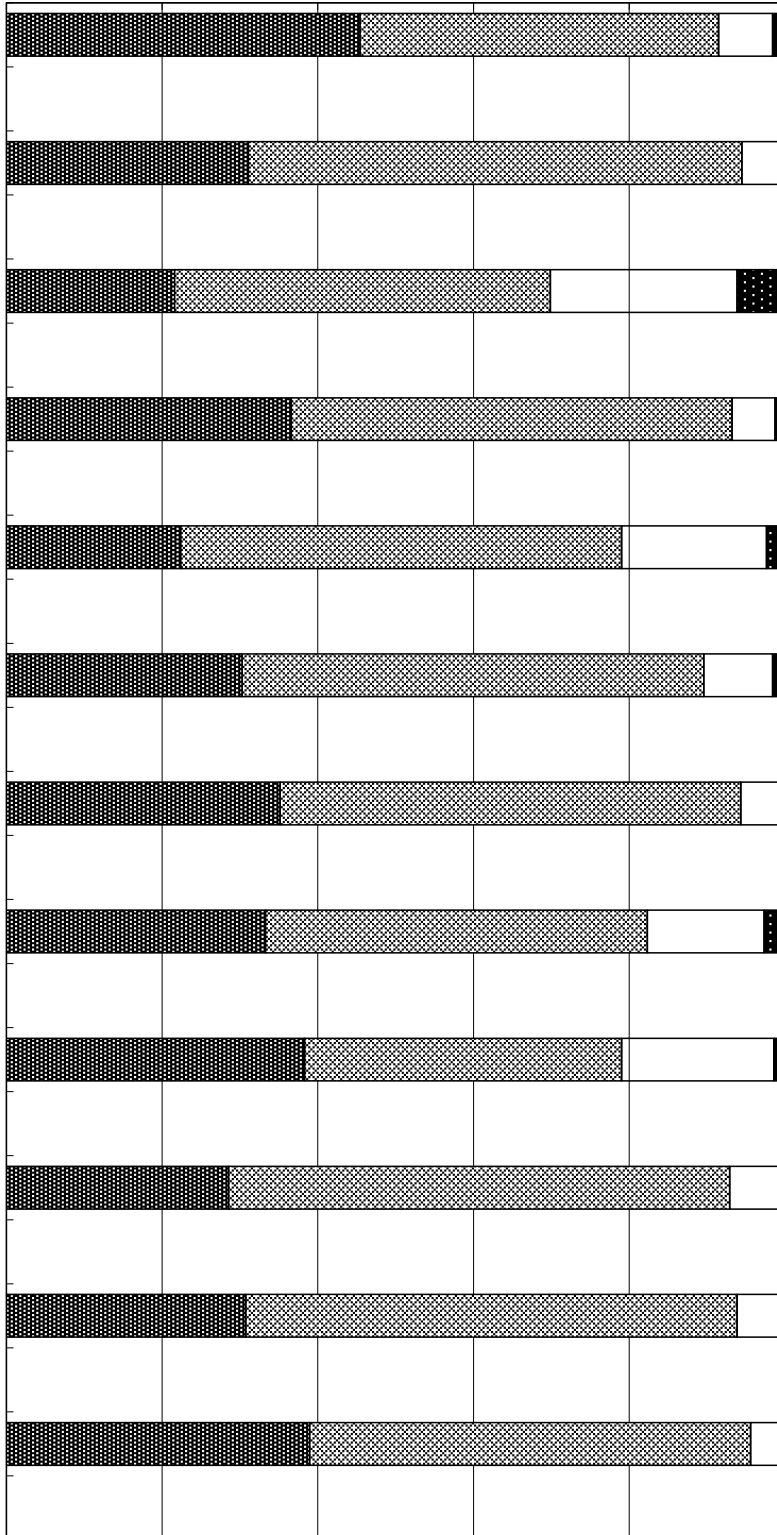
10、早寝早起きなど、規則正しい生活をしている。

11、体育の時間や休憩時間には、体をよく動かしたり、外で遊んだりしている。

■よくあてはまる ■だいたいあてはまる □あまりあてはまらない ■あてはまらない

保護者アンケート集計

0% 20% 40% 60% 80% 100%



1 子どもは、たのしく学校に行っている。

2 学校は、子どもの学習内容が身につくよう、わかりやすく指導している。

3 子どもは、自分で考え工夫しながら宿題などの家庭学習に取り組んでいる。

4 学校は、子どもの間違った行動について、適切に指導している。

5 子どもは、学校や地域や家庭で、進んであいさつしている。

6 学校は、子どものことについて相談できる。

7 子どもは、思いやりの心を持って行動している。

8 子どもは、早寝早起きなど規則正しい生活をしている。

9 子どもは、運動に親しみ、体をよく動かしている。

10 学校は、いじめ等がない学級づくりに努めている。

11 学校は、PTAや地域団体と連携し、子どもの安全を守る学校になっている。

12 学校は、学校だよりやホームページ、各種便りなどを通して、学校に関する情報をわかりやすく伝えている。

■ よくあてはまる

■ だいたいあてはまる

□ あまりあてはまらない

■ あてはまらない